

北海道・北東北の 縄文遺跡群の魅力と活用

～世界遺産登録までの歩みから～



2021年7月27日、北海道・北東北の縄文遺跡群が世界遺産に登録されました。これにより世界文化遺産として保護し未来に伝えていく使命が課せられますが、それぞれの地域にとっては、これをいかに地域の活性化に結び付けていくかが重要です。

世界遺産登録に当たって4道県をとりまとめ、縄文遺跡群世界遺産登録推進本部の事務局を担った青森県企画政策部世界文化遺産登録推進室と、2つの遺跡が構成資産となった函館市教育委員会、道内のとりまとめ役となった北海道環境生活部文化局文化振興課縄文世界遺産推進室をそれぞれ訪ねました。

定住社会と複雑な精神文化を育んだ縄文時代

今から約1万5千年前。氷河期が終わるとともに急速な温暖化が進み、ドングリヤクリ、クルミが実る落葉広葉樹の森が広がり、海水面の上昇や降雨で運ばれた土砂の堆積により、魚介類が豊富に生息できる地形や環境が形成されて縄文時代が始まりました。

縄文時代は1万年以上も続き、人々は採集・漁労・狩猟を生業にして、自然とともに暮らしていました。

かつて縄文時代は、未開だとか、未発達だとか思われてきましたが、これまで発見されたさまざまな縄文遺跡からそれは覆され、採集・漁労・狩猟を生業にし

て定住し、その暮らしを発展・成熟させてきたことがわかっています。

また、その精神文化は、自然や祖先を敬う心や豊穡への祈りなどがうかがわれます。各地で祭祀や儀式に使われたと考えられる遺構や遺物^{きいし}が出土しており、当時の人々の心に思いをはせることができるとともに、現代では忘れられてしまった何かを訴えているように感じます。

北海道・北東北の縄文遺跡群

1万年以上も続いた縄文時代の暮らしや精神文化を伝える貴重な世界文化遺産が「北海道・北東北の縄文遺跡群」です。北海道6、青森県8、秋田県2、岩手県1の合計17カ所で構成され、関連資産が2カ所あります。

縄文時代の定住は、開始期（居住地の形成/集落の成立）、発展期（集落施設の多様化/拠点集落の出現）、成熟期（共同祭祀場と墓地の進出/祭祀場と墓地の分離）の3区分6期に分類することができます。

世界遺産に登録されたことで、遺跡見学に出かけてみようとする人は少なくないでしょう。見学の際は、この区分とともに定住と精神文化の視点を意識しておくことにより理解が深まります（30、31ページの北海道・

北東北の縄文遺跡群参照)。

広範囲にわたって遺跡が点在しているため、なかなかすべての遺跡を周遊することは難しいでしょうが、身近な地域にある遺跡から見学していくことで、ほかの遺跡との関連性や定住の発展段階の違いがわかりやすくなり、出土品の意義や希少性などが感じられると思います。

地域間連携で世界遺産を目指す

4道県、13市町に17カ所の構成資産。この数を見ただけで、その調整の苦勞がうかがえますが、世界遺産登録への調整役は青森県が担っていました。

青森県には、縄文遺跡の中でもわが国を代表する特別史跡「三内丸山遺跡」があります。その存在は江戸時代から知られていましたが、1992年、県営野球場建設に当たって事前に行われた発掘調査で、貴重な遺構や遺物が次々と見つかりました。列状に並んだ大人の墓や大量の遺物が埋まっている盛土、植物でできた編み物の袋「縄文ポシエット」など、保存状態の良い貴重な出土品が大量に発見されました。さらに、直径1mほどのクリの巨大な木柱の発見は、全国的に注目が集まり、大きな話題となりました。

1994年8月、青森県は野球場建設を中止し、遺跡の永久保存と活用を決定。異例の決断にテレビ報道や

新聞紙面もわきました。以来、現在まで発掘調査が継続的に行われ、ガイダンスや展示施設の充実を図り、隣接する青森県立美術館と並んで青森の観光スポットとして定着しています。

2005年10月には三村申吾知事が県内にある縄文遺跡の世界文化遺産登録推進を表明し、2006年4月には教育庁文化財保護課に世界文化遺産登録推進プロジェクトチームが設置されました。

世界文化遺産に登録されるためには、事前に国内の遺産候補リストである「暫定一覧表」に記載されなければいけません。暫定一覧表への記載は、文化庁が選定してきました。ところが、2006年9月に地方自治体からの提案をもとに審査・選定する方針が打ち出されたことで、青森県は縄文遺跡群を有する県内の市町と連名で「青森県の縄文遺跡群」の提案書を提出することになりました。この時は秋田県も「ストーンサークル」の提案書を提出していました。

これらの提案は文化庁で審査され、翌年2月に継続審査となりました。この審査では、縄文文化の定義と世界史上の位置づけ、広域に所在する資産の再構成という課題が示されました。

わが国には、約47万カ所の遺跡があり、そのうち縄文遺跡は約9万4千カ所といわれており、その2割が北海道・北東北の4道県にあります。

「縄文時代に行政区分はありませんから、広域に所在する資産の再構成という指摘は覚悟していました。それよりも大きな課題として認識していたのは、地下遺構であるということ。資産がほとんど地下にあるので、価値がわかりにくいのです」と言うのは、青森県企画政策部世界文化遺産登録推進室の岡田康博専門監です。審査の過程でそこをクリアできるこ



三内丸山遺跡で見つかった6つの大型掘立柱建物跡からは、その巨大さがわかる



三内丸山遺跡の調査責任者の経歴を持つ岡田専門監

とがわかり、構成資産を再構築するに当たっては青森県から北海道、秋田県、岩手県にそれぞれ出向いて、共同での提案を呼びかけました。2007年に北海道・北東北知事サミットにおいて4道県での共同提案が正式に合意され、同年に文化庁に提案書を提出。2009年1月に暫定一覧表への記載が実現しました。

同年6月には、登録実現に向けて三村知事を本部長とする「縄文遺跡群世界遺産登録推進本部」が立ち上がり、青森県が事務局を担う形で4道県による世界遺産登録に向けた本格的な取り組みが始まりました。

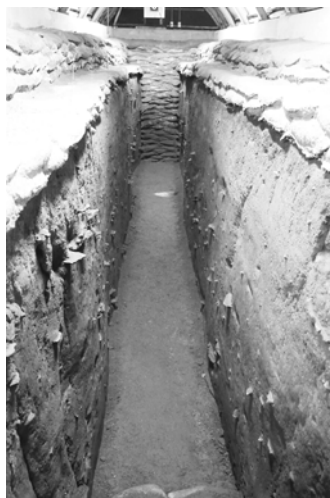
その後、構成資産の変更などがありましたが、2021年7月27日に世界遺産登録が実現しました。

縄文観を変えた三内丸山遺跡

わが国の縄文文化を語るときに欠かせないのが、先述の三内丸山遺跡です。安定した定住が営まれていたことや計画的なムラづくり、巨木を柱として利用していた大型の建物跡、クリ林の管理など、それまでの縄文時代や縄文人に対するイメージを大きく変えた遺跡です。

保存が決定した当時は、地元のマスコミや金融機関、商工会議所などが発起人となり、保存のための募金活動を始め、全国から集まった約1億2千万円は、青森県が設立した三内丸山遺跡保存・活用基金に組み入れられました。また、全国から見学者が殺到する中で、市民によるボランティアガイド「三内丸山応援隊」が結成されるなど、住民を巻き込みながら今につながっています。

岡田専門監は地下遺構である縄文遺跡は、その価値や魅力がわかりにくいと話していましたが、三内丸山遺跡では大型掘立柱建物や大型竪穴建物の復元、土の中に大量の土器や石器などが埋まっている様子がわか



土器や石器が埋まっている様子がわかるように工夫された南盛土

る南盛土など、その見せ方にもこだわりが感じられます。

それは、ガイダンス施設の「縄文時遊館」も同様です。約6mの高さの壁に発見された縄文土器のかけらをちりばめた「縄文ビッグウォール」や、加工した痕跡がわかるクリの巨大

木柱の展示など、発見当時の驚きと衝撃、その規模の大きさが伝わってきます。常設展示室「さんまるミュージアム」には多言語対応のタブレットが多数配置され、インバウンドへの対応も考慮されており、県を挙げて取り組んできたこれまでの思いが現れています。

縄文を地域の活性化につなげるために

青森県では2015年11月に企画政策部に世界文化遺産登録推進室が新設され、それまで教育委員会が担っていた世界遺産登録に向けた事業や取り組みは、政策の中核部門に位置づけられました。また、青森県基本計画「『選ばれる青森』への挑戦」を踏まえて、「『青森の縄文遺跡群』活用推進ビジョン」が2020年3月に策定されました。そこでは、10年後の将来像として「みんなが集う憩いの場 世界に誇る『JOMON』遺跡群」が掲げられました。

ビジョンでは、保存管理や景観形成などとともに、観光はもちろん地域づくり、人づくり、生業づくりなど、幅広い分野で県内の縄文遺跡群を活用していくことを謳っています。

「遺跡の保存と活用が両輪で進むように、また議論の



世界遺産登録で「青函圏のさらなる連携に期待したい」と言う白戸室長

過程を共有して同じ方向を向いて進めていこうというねらいから、関係市町の遺跡と観光の担当者など、保存と活用の際にプレイヤーになる人たちに集まっていただけ、アイデアを出し合って策定しました」と世界文化遺産登録推進室の白

戸明子室長は言います。

2016年度からは「あおもりJOMONプロモーション企画運營業務」として、県内の縄文遺跡群を未来に活かし伝える事業を公募していますが、今年度は縄文遺跡群の土壌から採取した酵母を取り出して商品化するプロジェクトが採択されるなど、ユニークな取り組みも始まっています。

遮光器土偶で知られる「亀ヶ岡石器時代遺跡」がある県内のつがる市では、市の中心地にあるJR木造駅の駅舎に「しゃこちゃん」と呼ばれて市民に親しまれている遮光器土偶をモチーフにした巨大なモニュメントを設置したり、マンホールのデザインや街灯にも「しゃこちゃん」が採用されており、まちのシンボルとして定着しています。

岡田専門監は今後に向けて「世界遺産登録で勝負できる期間はありますが、それだけでは立ち行かなくなることは想定されます。地域にあるほかのコンテンツを掘り出して磨き、情報発信していかなければいけない。それぞれの自治体が自分のまちにある資源を見つめ直しておくことが重要です」と言います。

三内丸山遺跡と並ぶ大船遺跡

1996年、北海道旧南茅部町^{※1}で、墓地を建設するために行った事前調査から、大規模な居住跡があるこ

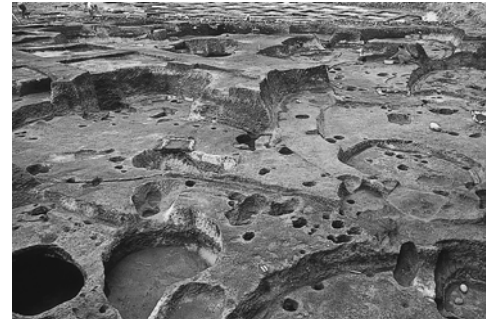
とが確認され、遺跡を保存することが決断されました。これが世界遺産の構成資産の一つである「大船遺跡」です。三内丸山

遺跡の調査から数年後だったこと、北海道でも屈指の縄文時代の大規模集落跡ということから、大船遺跡も大きな注目を集めました。

南茅部町は、1959年に尾札部村と白尻村が合併して生まれたまちです。町内で初めて埋蔵文化財発掘調査が行われたのは、1963年。北海道函館中部高等学校が試掘調査を行ったとされ、翌年に南茅部町文化財保護条例が制定されました。その後、北海道高等学校文化連盟函館地区郷土史考古学会による発掘調査が行われ、以降ほぼ途切れなく町内のどこかで調査が行われてきました。南茅部地域には約100カ所、400万点以上の土器や石器の遺物が見つかっています。

1973年には函館市を除いた渡島・檜山管内の自治体の中で初めて学芸員を採用し、その蓄積が受け継がれてきました。1975年8月には、地元の主婦がジャガイモを収穫中に土偶を発見。これが、のちに北海道唯一の国宝となった「中空土偶」でした。

「当時は家を建てるにも調査しなければいけないため、まちの中で縄文はやっかいものでした。でも、だんだん縄文をまちづくりに活かしていこうという気運が生まれてきました」と言うのは、函館市教育委員会生涯学習部文化財課兼世界遺産登録推進室の福田裕二主査（学芸員）です。



重なり合う竪穴建物跡が見つかった大船遺跡
(出典：JOMON ARCHIVES (函館市教育委員会撮影))



「建物を復元した大船遺跡とコの字形の盛土の周辺のくぼみを残した垣ノ島遺跡と対照的な展示の工夫も感じてほしい」と福田主査

※1 旧南茅部町

南茅部町は、2004年に戸井町、恵山町、楸法華村とともに函館市に編入合併された。

南茅部町は、1988年にはまなす財団の地域プロジェクトに採択されました。当時北海道開発庁は、地域において構想されたまちづくりプロジェクトの支援を進めており、重要なプロジェクトは北海道特定開発事業推進調査費によって、はまなす財団が調査していました。南茅部町のプロジェクトは国道バイパス建設を前に、新商業ゾーンや温泉施設の構想を進める新しいまちづくりに向けたものでした。

このような北海道開発行政との連携の伝統は、その後の「道の駅」の整備にもつながっていきます。

国宝のある「道の駅」と隣接する遺跡

旧南茅部町にあるもう一つの世界遺産の構成資産が「垣ノ島遺跡」です。



垣ノ島遺跡の盛土遺構（出典：JOMON ARCHIVES）

国道改良工事に伴う発掘調査が2000～03年度に行われ、足形付土版、祭祀や儀礼に伴うと考えられる漆塗り注口土器などの遺物がまわって出土し、重要な遺跡であると

認識されました。2003年には「コ」の字形をした大規模な盛土遺構も確認され、2009年まで調査が続き、2011年に国の史跡に指定。翌年、「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産の一つとして追加されました。

函館市には300カ所以上の遺跡があります。南茅部地域の縄文時代の遺跡群は「南茅部縄文遺跡群」として位置づけられ、2006年3月には「函館市南茅部縄文遺跡群整備基本構想」が策定されました。この構想のもと、新たなまちづくりや観光振興の創出を目指し



函館市縄文文化交流センター

て、史跡の整備や「函館市縄文文化交流センター」の建設を進めてきました。

2011年にオープンした函館市縄文文化交流センターは道の駅「縄文ロマン南かやべ」を併設しており、駐車場は国土交通省北海道開発局が整備しています。「茅空」と名付けられた国宝の中空土偶が展示され、“国内唯一の国宝のある道の駅”として発信しています。

函館市縄文文化交流センター館長を務め、現在は北海道環境生活部の縄文世界遺産推進室に籍を置く阿部千春特別研究員は「開発行政のサポートがあったからこそ、旧南茅部町の縄文遺跡を残すことができました」と言います。

発掘調査では多くの作業員が雇用されることから地元で雇用が生まれ、その作業にかかわることで縄文への愛着や理解が生まれます。その過程は、地域の活性化につながる大きな要素になります。

北海道とともに、北海道開発行政は、地域の文化遺産を後世につなげる縁の下の力持ちの役割を果たしてきたといえるでしょう。

函館観光のすそ野を広げる縄文遺跡

1998年に南茅部町で発掘作業員の仲間が立ち上げた市民団体に「北の縄文CLUB」があります。縄文時

代の生活と文化を楽しむ人々の集まりで、遺跡の清掃活動や体験講座など、縄文遺跡の保存活動や普及活動、情報発信などを行ってきました。メンバーの中には専業主婦から学芸員資格を取得し、現在は函館市縄文文化交流センターの指定管理者となっている（一財）道南歴史文化振興財団で活躍している人もいます。

福田主査は、函館市との合併によって、縄文が地域のアイデンティティや団結力を増す要素となったのではないかと指摘します。

例えば、縄文文化を地域振興につなげる取り組みを住民の総力で進めようと、2008年に町内会や漁協などが「函館市南かやべ縄文文化創生の会」を発足させ、縄文文化を産業づくりや観光振興につなげていこうと活動を続けています。

一方、函館市との合併は、遺跡保存や関連施設整備、他の観光資源との連携など、南茅部地域にとっても有益に作用したといえるでしょう。「世界遺産登録で縄文遺跡の存在は、函館観光のすそ野を広げたといえます。近隣には関連資産の鷲ノ木遺跡（森町）がありますが、鷲ノ木地区は箱館戦争の際に榎本武揚や土方歳三らが上陸した場所としても知られています。ほかにも北海道ならではのアイヌのチャシ^{※2}の遺跡など、周辺の歴史的な資源と組み合わせるなど各地と連携し、輪を広げていきたい」と、福田主査は言います。

青函交流の新たな展開

北海道では2021年3月に「北海道における縄文世界遺産の活用あり方」がまとめられ、「未来へつづく、一万年ストーリー。」をキャッチフレーズに施策が展開されていくことになっています（北海道における縄文遺跡群の活用あり方や今後の展望については、32ページの「縄文・美しい謎 第10回」をご覧ください）。また、道内の関係自治体で構成する協議会を設置する

とともに、今後は関係団体などとの連携が予定されています。また、道内の他の構成資産を有する市町では、展示施設「入江・高砂貝塚館」（洞爺湖町）のリニューアルオープン、キウス周提墓群（千歳市）でのボランティアガイド開始など、この機をとらえてさまざまな取り組みが始まっています。

今回取材をした人々からは、世界遺産登録の過程では、各地の学芸員同士のつながりや、縄文文化に親しむ市民団体間での交流など、これまでのネットワークの蓄積が有効に機能したという声が一様に聞かれました。

一方で、長く活動を続けてきた地域では、団体メンバーらの高齢化という課題にも直面しています。17の遺跡群を有機的につなげて、お互いに相乗効果が生まれるような仕掛けづくりや各遺跡のガイド対応も大きな課題です。特に、ガイドについては自然分野では多様なニーズに対応できるガイドが見られるようになっていますが、文化遺産のガイド養成は海外の事例などを参考に、演出法なども工夫しながら取り組んでいく必要があるでしょう。

また、青函地域の交流の機運を高め、活性化に向けた取り組みも大切でしょう。南北海道と北東北の交流は1987年の青函トンネル開通、翌年の供用開始を契機に、既存圏域を超えた圏域間交流のモデルとして西瀬戸地域などとともに関心が高まりましたが、その後は停滞しています。北海道新幹線により短時間で結ばれるようになった青函地域の交流を高め、「青函」という地域のアイデンティティの醸成を図っていく転機になることが期待されます。


世界遺産登録をどのように地域の活性化に活かしていくのか。それは、遺跡群がある地域だけでなく、それぞれの地域が地元にある縄文文化やそのつながりを探りながら、地域の思いと知恵を集めて向き合っていくことが大切だといえるでしょう。

※2 チャシ
15ページ参照。

北海道・北東北の縄文遺跡群

※<https://jomon-japan.jp/>内の説明文を引用／
はガイダンス施設／Bは関連資産

⑨ 入江貝塚 (北海道洞爺湖町)


入江・高砂貝塚館 ☎0142-76-5802

内浦湾を望む段丘上にある貝塚を伴う集落跡。貝塚からは貝殻・魚骨・海獣骨のほか、動物の骨や角を加工した釣針や銚などが出土し、漁労を中心とした生業を示す。墓域からは、幼いころに筋萎縮症に罹患した成人の骨が見つかっており、集落内で手厚い介護を受けながら生きながらえたことを伝える。



出典: JOMON ARCHIVES (洞爺湖町教育委員会撮影)

⑩ 高砂貝塚 (北海道洞爺湖町)


入江・高砂貝塚館 ☎0142-76-5802

内浦湾をのぞむ低地に立地する共同墓地。土坑墓と配石遺構からなる墓域、貝塚が配置されている。土坑墓には、土器や石器、石製品などの副葬品を伴い、ベンガラ(赤色の顔料)が散布されている。このほか、抜歯の痕跡が認められる例や胎児骨を伴う妊産婦の骨なども確認され、当時の葬送の様子を伝える。



出典: JOMON ARCHIVES

① 大平山元遺跡 (青森県外ヶ浜町)


外ヶ浜町大山ふるさと資料館 ☎0174-22-2577

縄文時代開始直後の遺跡であり、旧石器時代の特徴をもつ石器群とともに、土器と石鏃が出土した。土器に付着した炭化物の年代測定の結果、15,000年以上前のものであることが明らかにされている。移動に適さない土器の出現は定住の開始を示し、遊動から定住へと生活が大きく変化したことを知る上で重要な遺跡である。



出典: JOMON ARCHIVES (外ヶ浜町教育委員会撮影)

② 垣ノ島遺跡 (北海道函館市)


函館市縄文文化交流センター ☎0138-25-2030

太平洋をのぞむ段丘上に立地する紀元前5,000年ごろの集落跡。居住域と墓域が分離したことを示す集落である。竪穴建物からは漁網用の石錘が出土し、漁労が活発に行われていたことがわかる。墓からは、この地域に特徴的な幼児の足形を押し付けた粘土版が副葬される例があるなど、当時の葬制や精神性を示す。



出典: JOMON ARCHIVES

④ 小屋野貝塚 (青森県つがる市)


つがる市縄文住居展示資料館(カルコ) ☎0173-42-6490

海進期に形成された古十三湖に面した貝塚を伴う集落跡。集落には、竪穴建物、墓、貝塚、貯蔵穴など、多様な施設が配置されている。貝塚からは、汽水域に棲息するヤマトシジミを主体に、魚骨や海獣骨、装身具であるベンケイガイ製の貝輪の未製品(写真)が多数出土し、内湾地域における生業や集落の様子を示す重要な遺跡である。



出典: JOMON ARCHIVES (青森県立郷土館所蔵)

⑬ 大森勝山遺跡 (青森県弘前市)


弘前市立裾野地区体育文化交流センター ☎0172-99-7072

岩木山麓の丘陵上に立地する大規模な環状列石を伴う祭祀遺跡。環状列石は、盛土した円丘の縁辺部に77基の組石を配置し、長径48.5m、短径39.1mのやや楕円形に造られている。環状列石及びその周辺からは、円盤状石製品が約250点出土し、環状列石に関連する祭祀・儀礼用の道具と考えられている。



出典: JOMON ARCHIVES (弘前市教育委員会撮影)

⑥ 三内丸山遺跡 (青森県青森市)

三内丸山遺跡センター ☎017-766-8282

陸奥湾をのぞむ段丘上に立地する大規模な拠点集落。集落は、竪穴建物、墓、貯蔵穴、掘立柱建物、盛土など多様な施設で構成される。膨大な土器や石器、日本最多の2,000点を超える土偶などの祭祀遺物、多種多様な動物骨や魚骨、グリやクルマなどの堅果類などから、内湾地域における生業と祭祀・儀礼の多様性を示す重要な遺跡である。



出典: JOMON ARCHIVES (青森県教育委員会撮影)

⑮ 亀ヶ岡石器時代遺跡 (青森県つがる市)


つがる市木造亀ヶ岡考古資料室 ☎0173-45-3450

海進期に形成された内湾である古十三湖に面した大規模な共同墓地。台地上に多数の墓がみられ、その周囲の低湿地には捨て場が形成され、漆塗りの土器や藍胎漆器、玉類などが多数出土している。中でも大型土偶(国指定重要文化財)は、その眼部の表現が「遮光器土偶」の名称の起りとなったことで知られている(写真はレプリカ)。



出典: JOMON ARCHIVES (つがる市教育委員会所蔵)

⑪ 伊勢堂岱遺跡 (秋田県北秋田市)


伊勢堂岱縄文館 ☎0186-84-8710

米代川近くの段丘上に立地する環状列石を主体とする祭祀遺跡。遠方の山並みが一望できる段丘北西端に4つの環状列石が隣接して配置されている。いずれも直径30m以上で、最大のもは直径約45mに及ぶ。環状列石の周囲からは、土偶や動物形土製品、鐸形土製品、岩版、三脚石器、石剣などの祭祀遺物が多数出土している。



出典: JOMON ARCHIVES (北秋田市教育委員会撮影)

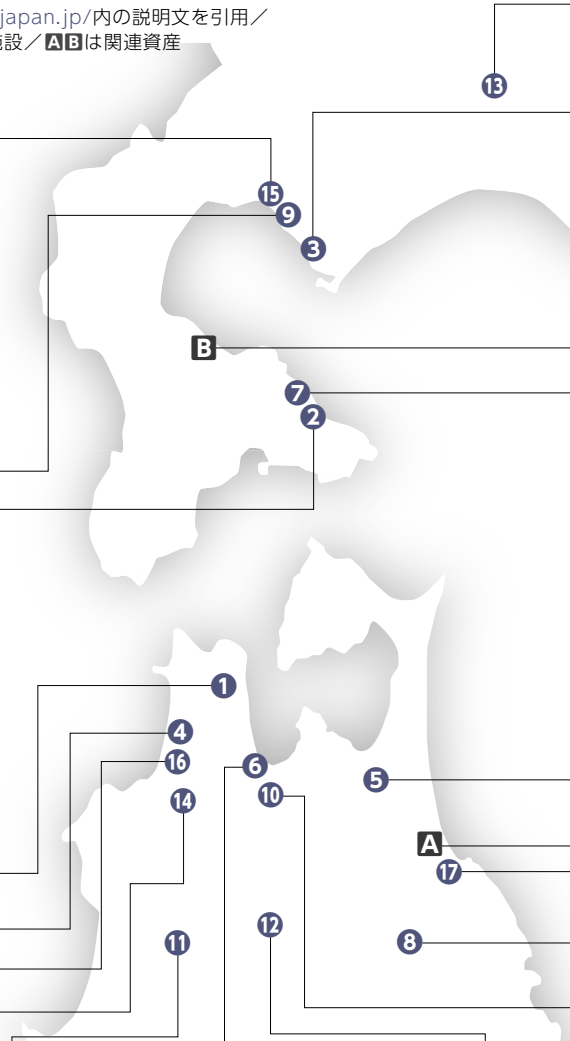
⑫ 大湯環状列石 (秋田県鹿角市)

大湯ストーンサークル館 ☎0186-37-3822

大湯川沿いの段丘上に立地する環状列石を主体とする祭祀遺跡。万座と野中堂の2つの環状列石は川原石を組み合わせた配石遺構によって二重の円環が形成され、それぞれに「時計状組石」が配置されている。環状列石の周囲には掘立柱建物が同心円状に配置され、土偶や鐸形土製品、石刀などの祭祀遺物が数多く出土している。



出典: JOMON ARCHIVES



② 鷺ノ木遺跡 (北海道森町)

④ 森町遺跡発掘調査事務所 ☎01374-3-2240

北海道最大規模の環状列石を伴う祭祀遺跡。環状列石は、楕円形の配石を中心とし、その外側に円環状の列石が二重に巡り、直径約37mのほぼ円形である。その周辺には、竪穴の中に7基の土坑墓を伴う竪穴墓域がある。環状列石のある台地からは駒ヶ岳を望むことができ、自然に対する考え方や信仰がうかがえる。



出典: JOMON ARCHIVES (森町教育委員会撮影)

⑤ ニツ森貝塚 (青森県七戸町)

④ ニツ森貝塚 ☎0176-68-2612

太平洋に続く小川原湖に面した段丘上に立地する大規模な貝塚を伴う集落跡。貝塚には、下層にハマグリやマガキなどの海水性、上層にヤマトシジミなどの汽水性の貝殻が堆積し、海進・海退による環境変化への適応を示す。動物の骨や角でつくられた骨角器も多数出土し、中でも鹿角製櫛(写真)は高い精神性と加工技術を伝える。



出典: JOMON ARCHIVES (青森県埋蔵文化財調査センター所蔵、田中義道撮影)

⑧ 御所野遺跡 (岩手県一戸町)

④ 御所野縄文博物館 ☎0195-32-2652

馬淵川沿いの段丘上に立地する拠点集落。東西に長い台地の中央に配石遺構を伴う墓域、祭祀場である盛土が形成され、その周囲に大型・中型・小型の竪穴建物配置されている。祭祀場である盛土からは大量の土器や石器とともに、焼けた動物骨や堅果類などが出土し、火を用いた祭祀が繰り返されたことを伝える。



出典: JOMON ARCHIVES

③ 北黄金貝塚 (北海道伊達市)

④ 北黄金貝塚情報センター ☎0142-24-2122

内浦湾をのぞむ丘陵上に立地する貝塚を伴う集落跡。貝塚からは、貝殻や魚骨、動物の骨や角でつくられた骨角器などが出土し、海進・海退などの環境変化に適応しながら漁労を中心とした生業が行われていたことを示す。低地の水場遺構では、すり石や石皿などの石器の廃棄に伴う祭祀が行われていたと考えられている。



出典: JOMON ARCHIVES (伊達市教育委員会撮影)

⑦ 大船遺跡 (北海道函館市)

④ 函館市縄文文化交流センター ☎0138-25-2030

太平洋をのぞむ段丘上に立地する拠点集落。深さ2mを超える竪穴建物や貯蔵穴、墓、盛土などがある。祭祀場である盛土には、土器・石器などが累積し、祭祀・儀礼が継続して行われていたことを示す。クジラ、マグロなどの海獣骨や魚骨、クリやクルミなどの堅果類も出土し、沿岸地域における生業と精神文化を示す遺跡である。



出典: JOMON ARCHIVES

⑩ 是川石器時代遺跡 (青森県八戸市)

④ 八戸市埋蔵文化財センター-是川縄文館 ☎0178-38-9511

中居、一王寺、堀田の3つの遺跡からなる。中でも、中居遺跡は多様な施設を伴う集落であり、土器や土偶のほか、漆塗りの弓(写真)や櫛などの漆製品が多数出土している。狩猟具や漁労具、クリ・トチなどの堅果類、サケ・マスの魚骨、貯木や堅果類の加工を行ったと推定される水場など、生業の内容を知ることができる。



出典: JOMON ARCHIVES (八戸市教育委員会撮影)

⑬ キウス周提墓群 (北海道千歳市)

④ 千歳市埋蔵文化財センター ☎0123-24-4210

石狩低地帯をのぞむ緩やかな斜面に立地する大規模な共同墓地。周提墓は、円形の竪穴を掘り、掘った土を周囲に積み上げて構築され、その内側に複数の墓が配置されている。9基の周提墓が群集し、最大のは外径83mで、高さ4.7mに達する。独特な墓制であり、当時の高い精神性と社会の複雑化を示す重要な遺跡である。



出典: JOMON ARCHIVES (千歳市教育委員会撮影)

① 長七谷地貝塚 (青森県八戸市)

④ 八戸市博物館 ☎0178-44-8111

海進期に形成された貝塚を中心とした集落遺跡。貝塚からは、暖かい場所に棲息するハマグリをはじめ、ズスキヤクロダイなどの魚骨、組合せ式の釣針や銚頭が多数出土し、活発な漁労活動を伝える。貝塚は、気候の温暖化により海水面が上昇した時期に形成されており、人々が環境に適応しながら暮らしていたことを示す。



JOMON ARCHIVES (八戸市教育委員会撮影)

⑩ 小牧野遺跡 (青森県青森市)

④ 青森市小牧野遺跡保護センター 縄文の学び舎・小牧野館 ☎017-757-8665

八甲田山西麓に広がる台地上に立地する環状列石を主体とする祭祀遺跡。環状列石は、中央帯・内帯・外帯の三重となり、その周りに一部四重となる列石もみられ、全体で直径55mになる。内帯と外帯は楕円形の石を縦・横に配置して円環が形成されている。土偶やミニチュア土器、三角形岩版などの祭祀遺物が多数出土している。



出典: JOMON ARCHIVES (青森市教育委員会撮影)

定住の変遷からみる「北海道・北東北の縄文遺跡群」

集落の展開	(15000年前) 13,000BCE	(9000年前) 7,000BCE	(7000年前) 5,000BCE	(5000年前) 3,000BCE	(4000年前) 2,000BCE	(3500年前) 1,500BCE	(2400年前) 400BCE										
定住の開始	居住地の形成		定住の発展		定住の成熟												
構成資産	① 大平山元遺跡 13,000BCE	② 垣ノ島遺跡 5,000BCE	③ 北黄金貝塚 5,000BCE~3,500BCE	④ 田小屋野貝塚 4,000BCE~3,000BCE	⑤ ニツ森貝塚 3,500BCE~3,000BCE	⑥ 三内丸山遺跡 3,000BCE~2,200BCE	⑦ 大船遺跡 2,500BCE~2,000BCE	⑧ 御所野遺跡 2,500BCE~2,000BCE	⑨ 入江貝塚 1,800BCE	⑩ 小牧野遺跡 2,000BCE	⑪ 伊勢堂岱遺跡 2,000BCE~1,700BCE	⑫ 大湯環状列石 2,000BCE~1,500BCE	⑬ キウス周提墓群 1,200BCE	⑭ 大森勝山遺跡 1,000BCE	⑮ 高砂貝塚 1,000BCE	⑯ 亀ヶ岡石器時代遺跡 1,000BCE~400BCE	⑰ 是川石器時代遺跡 1,000BCE~400BCE
関連資産		① 長七谷地貝塚 6,000BCE							② 鷺ノ木遺跡 2,000BCE								

* <https://jomon-japan.jp/> をもとに作成